

# えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㊟

霧がたちこめるなか、人を得意とした南画の系統のを寄せつけないかのように画家と考えられる。

そびえ立つ山。四国最高峰、石鎚山を描いている。

本図を描いた林澆光(とらいこう)については経歴が不明だが、小松藩絵師森田南澆の門人といわれている。南澆は「南湖、文晁を併せて天下の二老と称す」といわれるほどの名声を得ていた春木南湖に師事したことから、澆光も中国絵画に影響を受け、山水や花鳥

本図の上部には、今治藩医であった半井梧庵(なか)の内容の賛が加えられている。1874(明治7)年7月8日、石鎚山上に安置する神像が讃岐の高松で造られ、石岡神社神官の玉

井忠寛がそれを奉遷した。その時に諸国から集まった信者が熱狂して、拍手礼拝するとともに、雨が降るこ

とくさい銭を投じた。この話を聞いた澆光が想像してその様子を描き上げた。

本図を遠くから見ると一般的な山水画のようだが、近づくと豆粒のような小さい人間が石鎚山にたくさん取り付いていることに気づく。石鎚登拝のクライマックスともいえる一の鎖、二の鎖、三の鎖の急斜面を登る人々。「ナンマイダー」と唱えながら鎖を登る人々の声が聞こえてくるようだ。

ところで、梧庵は、愛媛の代表的な地誌「愛媛面影」の著者としても知られるが、澆光はその挿絵を手が

た。本図が描かれたころ、明治政府の神仏分離令を受けて、梧庵はこれまで神社を管理した前神寺に対して、神社の引き渡しを求める願書を提出している。多くの信者が神像を支持する姿が描かれた本図は、梧庵が考える石鎚山の理想的な姿を描き出したものともいえる。

石鎚画賛は、13日から2026年2月1日まで「テーマ展「石鎚山 歴史と民俗」」で展示。

(学芸課長・井上淳)

〈随時掲載します〉

## 熱狂する信者理想の姿



石鎚画賛、1874(明治7)年ころ個人蔵、県歴史文化博物館保管